放送大学
河合ゼミエッセイ集

放送大学と地域貢献

放送大学　河合ゼミエッセイ集
放送大学と地域貢献

編集者：　河合明宣・吉田瑞樹・松田君子
発行者：　日中朱鷺保護研究会
連絡先：　〒379-1417　群馬県利根郡みなかみ町東峰 220
河合明宣（電話：0278-64-1808）
印刷所：　高山印刷株式会社
発行日：　2020 年 8 月 15 日
ISBN ：　978-4-9910 263-2-4

まえがき

河合　明宣

河合ゼミエッセイ集は、修士修了生は吉田さん、卒研修了生は松田さんに分担をお願いし、TA の皆さんのご協力で 2018 年度の後半頃から呼びかけを始めました。2018 年度で退職予定であったので、卒研 / 修論を修了した方々から、ある程度テーマと字数を限定して、論考 / エッセイを書いて頂こうと考えました。理由は 2 つあります。

まず、その背景となる放送大学と社会の変遷について述べます。放送大学は、1983 年設置、2013 年に創設 30 周年を迎え、現在は 40 周年に近づいていますが、大きな転換点にあります。1983 年東京タワーからの放送が始まり、視聴可能な南関東学習センターが学生受け入れを開始しました。その後、全国にビデオ学習センター設置を始め、1998 年全国設置が完了し、ビデオ学習センターで全科履修生受け入れを開始しました。この年にビデオ学習センターは学習センターに改組されました。この全国での全科履修生受け入れ開始までを第 1 期として時期区分します。

この第 1 期の特徴は、放送授業以外に学習センターでの対面授業である面接授業及び卒業研究（6 単位）が必須であったことです。いつでも、どこでも、誰でも視聴できる生涯学習者に向け、いわば受動的学習機会を提供した学びの場において、卒業研究は、能動的学習機会を提供する極めて重要なものでした（注 1）。

しかし、全国化が達成された段階で学生総数は約 7 万人に達し、専任教員が指導できる範囲を超えているので卒業研究は、選択科目になりました。対面での指導であることから、学生にとっては主体的に調べて報告書を仕上げることは極めて労力と根気が必要であったため、履修者が激減しました。

一方、学生数は増加の一途を辿り、2000 年に修士課程が設置されます。本学学部卒業生の進学者より他大学卒の職業人や学士取得者が大勢を占めました。上位資格獲得の目的やグローバル化による海外勤務経験者や 60 歳退職後の再就職を希望する人達には、修士取得が極めて重要で必要な目標になっていきました。目的が明瞭で、職業経験のある 50 歳代の多彩な学生が入学してきました。月 1 回、対面ゼミ形式で指導をしました。しばらくすると、ゼミに出席を希望する修了生が現われました。

修士学生数増加により本学にも TA（教育支援者）制が導入された際、ゼミに参加し、分野の重ならない修士修了生複数名に TA をお願いすることにしました。本学は 1 名の TA に辞令を交付し一定の給料を支給することになり、また教員研究費でも同様に雇用できる制度なので他に 2、3 人にお願いしました。

河合ゼミは、修了生の参加によって、私からみれば非常に魅力的になったのではないかと思われます。各 TA は自分の職業に関する専門的知識を持ち、修士論文を書きあげています。私の指導の弱点を身に沁みて知っているので、それを補って後進をよく指導して頂いています。特に、一時期、多くの学生が在学していた時には TA 皆さんのゼミ参加によって大いに助けられました。

現役学生にとっても各自のテーマに関して、TA による鋭い専門的コメントによって視野を広げ、論文全体の構成を作る際に大きな助けとなっています。

私の教員としての経験から、修士課程設置から約 10 年余が放送大学に勢いがあった時期ではなかったかと思います。

2013 年、30 周年を迎える頃に大きな転換点に差しかかったと思います。修士課程は入学試験を実施します。社会経営科学プログラムでは、10 年間程度は競争で多くの学生が入学してきましたが、それ以降は定員に満たない年度もあるようになりました。同時に、放送を主体として公開遠隔教育を実施してきましたが 2006 年には、放送授業一部のインターネット配信を始めました。また、インターネットでのテレビ会議を用い、対面ゼミ形式ではない指導を導入しました。

全放送授業のインターネット配信に加え、2015 年から学習し、選択問題とレポート等の提出により単位認定試験無しで、成績が評価されるオンライン授業が始まりました。距離と時間との制約を減らした学習環境向上が図られています。単位認定は学習センターにおいて本人確認の上受験し、合格する必要がありました。現在、新しい形式による試験導入を決めて、その試行実験を始めています。

また、2018 年 10 月より授業番組（WAKABA）と生涯学習支援番組（AOBA）を BS 放送 2 チャンネル編成で放送しています。同時に、放送教材と印刷教材をセットとする従来の授業番組は、教科書を印刷しないオンライン授業への転換が進えています。生涯学習支援番

組制作が新たに加わり、教員の役割も大きく変わりつつあるといえます。現在、無料の生涯学習支援番組の受講結果を認証・記録する仕組みとして「ブロックチェーン」導入が試みられています。これは受講記録等の個人情報をセキュリティレベルが高く第三者に特定データのみの表示が可能な新しい情報技術です。認証書発行等による料金収入に結び付けたいとしています。

このような進展は、本学30周年以降、ICTが急速に発展する中で、第1期で普及した放送大学の生涯学習の内容／ターゲットが大きく変容していることの現れでもあります。私は40周年には2018年以降の流れ、双方向で学習するオンライン授業とBS放送2チャンネル編成が新しい生涯学習の環境になっていくと思います。ここまでを時期区分の第2期とします。

わが国は、1945年ポツダム宣言受諾・降伏し、1952年までGHQによる占領下に置かれました。占領期に農地改革、労働改革、財閥解体等の戦後改革を経て経済の復興が始まりました。1950年代半ばから1970年代までに高度経済成長と呼ばれる成長局面を迎え、終戦直後のベビーブームによって誕生した「団塊の世代」と呼ばれるコホートが高度経済成長とともに育っていきました。

多数の中学卒業生と高校卒業生の大半は、就職し首都圏や京阪神の臨海工業地帯に吸収されていきました。団塊の世代の人々の思いを込めた戦後日本の歴史に残る名曲といわれる井沢八郎「あゝ上野駅」は、1964年にリリースされました。資源が希少なわが国の産業政策（傾斜生産）は、「ものづくり」と呼ばれる第二次産業に特化し、原料輸入・製品輸出には海上輸送が不可欠でした。若者の大量な流失は内陸部の中山間農村に両親などの高齢者を残しながら、人口減少をもたらしました。この頃から過疎という言葉が使われ始めました。

日本が経験した一度だけの高度経済成長期を製造業関連の職種に就きながら、あるいは退職後に生涯学習を経験したことも、また一度限りでのことでありました。

第1期及び第2期での学習環境で生涯学習を経験した修了生が、なぜ放送大学に入学し、修了後学習した内容をどのように社会に役立てているのか。生涯学習が生活や職業経験に何をもたらしたか、また一人の人生をどう豊かにしたのか。修了生に対する、こうした点に関する、公開されている調査／研究は、多くはないといえます（注2）。

文科省の中央教育審議会生涯学習部会が大学の地域貢献の実践として放送大学を例示しました。それを受けて、2013年岡部前学長は、「地域貢献研究会」を発足させ、同時に調査研究費として応募を通して学長裁量経費を支給しました。私は、この研究会に参加し、本学の地域貢献活動とは一体どのようなものか。同窓会やサークル活動等が地域貢献活動の契機になるのか。在学生や修了生からインタビューを通してサークル活動等を具体的に調べて見たいと思っていました。

2014年河合ゼミ修了の吉田さんは、「グローバル経験シニア世代の地域貢献の可能性の考察―生涯学習はその入り口となりうるか、半田市の事例を踏まえて―」という修士論分を提出しました。吉田さんは、所属する愛知学習センター服部所長が応募した地域貢献に関する調査研究に参加し、報告書を書いていました。TAをお願いしていた埼玉学習センター所属の川島さんと3人で『放送大学研究紀要』（注1）にサークル活動を通した放送大学の地域貢献についての論考の投稿を目標に調査を始めました。

投稿するために主に埼玉及び群馬学習センターのサークル活動を調べました。その結果、上述2つの論文を提出しました。2つの論文で得られた結果から以下の3点が確認できたと考えます。

1. 放送大学の学びの種類の場所を整理し、8つの学習階層に、以下の4つの転換点での変容がある。1）受動学習から能動学習へ、2）フォーマルな学習からインフォーマルな学習へ、3）個人学習からグループ学習へ、4）学習から実践活動へ
2. 8つの学習階層を「時間コミュニティ」や「空間コミュニティ」などのコミュニティの種類に分類することにより、学習センター、サークル活動、地域貢献活動などの実践活動の3つが「時間コミュニティ」で「連結」されていること。
3. 上記2の「連結」の結節点に、ネットワークを内部から外部へと繋いだ「アクター」や「二次ノード」が存在し、その果たす役割が重要であることを認識しました。

しかし、何故、NPOや社会貢献を実践している団体と繋がりを広げていくのか、サークル活動を通して社会貢献へと向かう学習者の動機付けがなされる要因や、その結果サークル活動がどのように変容するのか、その原動力がどのように生み出されているのか、言い換えれば、サークル活動の個々のメンバーや組織の内発的動機と内発的報酬がどのように生成しているかを解明することが、次の課題であることを強く認識しました。

放送大学30年のあゆみ

沿革

1981年（昭和56年）	6月	放送大学学園法公布・施行
	7月	放送大学学園設立
1983年（昭和58年）	4月	放送大学学園により放送大学設置
1985年（昭和60年）	4月	放送による授業開始
	4月	学習センター（群馬・埼玉・千葉・東京第一・東京第二・神奈川）学生受入れ開始
1987年（昭和62年）	4月	諏訪地区学習センター学生受入れ開始
	11月	アジア放送・公開大学連合（AAOU）結成
1988年（昭和63年）	8月	甲府地区学習センター学生受入れ開始
1989年（平成元年）	4月	第1回卒業式の挙行
1990年（平成2年）	10月	ビデオ学習センター（北海道・広島・福岡・沖縄）学生受入れ開始
1991年（平成3年）	10月	ビデオ学習センター（宮城・石川・岐阜・大阪・香川・熊本）学生受入れ開始
1992年（平成4年）	10月	ビデオ学習センター（富山・静岡・愛知・長崎）学生受入れ開始
1993年（平成5年）	4月	東京第三学習センター学生受入れ開始
	10月	ビデオ学習センター（青森・岩手・京都・兵庫）学生受入れ開始
1994年（平成6年）	6月	ビデオ学習センターを地域学習センターに改組
	10月	地域学習センター（新潟・三重・高知・大分）学生受入れ開始
1995年（平成7年）	10月	地域学習センター（山形・栃木・岡山・愛媛）学生受入れ開始
1996年（平成8年）	10月	地域学習センター（秋田・滋賀・奈良・島根・宮崎）学生受入れ開始
1997年（平成9年）	10月	地域学習センター（福島・茨城・福井・鳥取・山口）学生受入れ開始
1998年（平成10年）	1月	CS放送（※パーフェクTV！）による全国放送開始 ※平成10年5月1日スカイパーフェクTV！（パーフェクTVサービス）に名称変更
	4月	地区学習センター及び地域学習センターを学習センターに改組
	10月	全国の学習センターで全科履修生の受入れを開始
	10月	学習センター（和歌山・徳島・佐賀・鹿児島）学生受入れ開始
1999年（平成11年）	4月	サテライトスペース（旭川市・北九州市）設置
2000年（平成12年）	4月	サテライトスペース（浜松市）設置
	4月	放送大学大学院（修士課程）設置
2001年（平成13年）	4月	東京第一、第二、第三学習センターを東京世田谷、文京、足立学習センターに名称変更
2002年（平成14年）	4月	サテライトスペース（福山市）設置
	4月	放送大学大学院学生受入れ開始・放送による授業開始
	4月	東京多摩学習センター学生受入れ開始
	4月	サテライトスペース（八戸市、姫路市）設置
	12月	放送大学の設置主体を特別な学校法人とするため、 放送大学学園法（平成14年法律第156号）公布
2003年（平成15年）	10月	放送大学学園法（平成14年法律第156号）の施行に伴い、 特殊法人から特別な学校法人に移行
2004年（平成16年）	3月	最初の大学院（修士課程）学位記の授与
	4月	サテライトスペース（いわき市）設置
2006年（平成18年）	12月	地上デジタル放送開始（関東エリア）
2007年（平成19年）	4月	放送授業科目（一部科目）のインターネット配信を開始
	10月	放送大学の英語名称を「The University of the Air」から 「The Open University of Japan」に変更
2009年（平成21年）	4月	ICT活用・遠隔教育センター設置
2011年（平成23年）	10月	BSデジタル放送開始
2012年（平成24年）	3月	CSデジタル放送終了
	3月	東京世田谷学習センター廃止
	4月	東京渋谷学習センター設置
	10月	AAOU総会を放送大学で開催
2013年（平成25年）	4月	教養学部情報コース、大学院情報学プログラム設置
	4月	ICT活用・遠隔教育センターを教育支援センターに改組

本部の建設工事

制作スタジオ

学習センターの視聴学習室

東京文京学習センター

放送大学学園本部

放送大学で得たもの

2008年度修士論文提出　庄司　利則

大学院で学び、今も心に残り大切に思っていることの一端をご紹介いたします。

1．放送大学生の強みは、現役一般大学生にない社会経験を積んでいることである。社会人経験者として得た情報・知識・知恵等の力は、ものの見方考え方を深め広げる。

2．放送大学での学びは、日々これから過ごしていく中で「自分自身の大きなバックボーン」となり必ず役に立つ。特に修士課程の学びでは、自分の中に「一本ピーンとした心棒」を通せた感が深い。

3．現場実践は、大切である。先生からのお話し（ブータンや南米の話や佐渡のトキ米など広範囲で多義）で得たものは、背伸びしなくてよい身近なテーマに取組む際であっても、時間と経費がかかるかもしれないが「まずやってみよう」ということである。

　実践の伴わない机上の空論は、評論家的な取組みに留まりやすい。例えば巷間で「思うだけなら大坂城も建つ」ということがいわれている。しかし、「まずやってみる」べきことは、城を建てるならば先ず「現地に出向き」生の状況を確認するが第一歩であり大切である。

4．課題に対しては、常に検討材料を身近に置き「物を考える」という「学びの方法」を得ることができて、現在も様々な課題に対し応用している。

　例としてゼミでの論文をまとめていった際は、越えなければならない課題や問題点という壁が多かれ少なかれでてきた。その際に遠く会津からゼミに行き来する高速バスや新幹線の中では、「作りかけの論文を座右に置き解決に向けたひらめき醸成」につとめ、「ああそうか。これで一歩前進」という感じになったことも何度かあり壁を越えられた。

5．ゼミ仲間は、福島・茨城・神奈川・岡山・長崎など全国におり「放送大学で学ぶ」という一点において共通項があるためか、ゼミ初日においてもすぐに打ち解け初対面のぎこちなさがはじめからなかった。喜びも苦楽も分かち合える仲間である。

　このような中でご指導いただく際は、易しく分かり易くしていただいたことが大半であったが，京都弁がチラッと混じる教育的指導もゼミの中で少々あったかなと懐かしく思い出される。

今後は、引き続き何らかの形で「わかりにくいことをわかり易く、わかることを楽しく温かく」ご指導いただければ幸いです。お世話になりありがとうございました。